

中越地震災害 15 年間の調査を振り返って ―災害伝承の取組―

応用地質(株) 正会員 ○上野 将司
 (株)山地防災研究所 正会員 櫻井 正明

1. はじめに

平成 16 年 10 月 23 日に発生した新潟県中越地震では多くの斜面災害が発生したが、地震動では移動しないと考えられていた地すべりの発生や深刻な河道閉塞の出現など、その後の防災対策や研究に大きな影響を与える特徴ある災害があった¹⁾。地震発生時の特筆すべき対策として、当時の山古志村では全村民の避難が実施され、長期の避難生活を強いられた。このような特徴ある災害の記録を後世に残す取組みが進められ、中越メモリアル回廊として 4 施設と 3 公園を結ぶ震災の記憶をたどるモデルルートが設定され、慰霊碑等を含めた災害碑も建立された。これらの災害伝承の取組について報告する。

2. 中越メモリアル回廊

中越メモリアル回廊の 4 施設とは、①長岡震災アーカイブセンター（長岡市）、②やまこし復興交流館（旧山古志村、現在は長岡市）、③川口きずな館（旧川口町、現在は長岡市）、④おぢや震災ミュージアム（小千谷市）であり、地震発生時の別々の自治体内に位置する。また 3 公園とは、⑤妙見メモリアルパーク（小千谷市）、⑥木籠メモリアルパーク（旧山古志村）、⑦震央メモリアルパーク（旧川口町）であり、震災の象徴的な場所として整備されている。現地調査では 4 施設のうち、写真 1、2 に示す 2 か所、公園は 3 か所（写真 3～5）について実態把握を行った。

視察した施設では、被災から復興状況を写真や床地図で示す展示スペース、映像施設、研修スペースなどが整備され、語り部などの支援員による防災学習や視察研修への対応プログラムが用意されていた。公園については、⑤妙見は親子 3 人が



写真 1 長岡アーカイブセンター



写真 2 やまこし復興交流館



写真 3 妙見メモリアルパーク



写真 4 木籠メモリアルパーク



写真 5 震央メモリアルパーク

乗った車が地すべりに巻き込まれ、男児が救出され母娘が犠牲になった現場である。ここは祈りの公園として整備されている（写真 3）。道路脇にあるので注目されやすいが、デザインを意識したためか震災伝承公園とは気付きにくいものになっている。入口の題字の英文表示には「Myoken Earthquake Memorial Park」と記されており、「妙見地震？」とはいつの地震かと惑わせる表示は残念に思う。⑥木籠は地すべりによる芋川の河道閉塞でダム湖となって浸水した木籠集落の家屋がそのまま残されている（写真 4 の左）。家屋の周囲は堆積土

キーワード 中越地震、災害伝承、自然災害伝承碑、災害復興

連絡先 〒331-0812 埼玉県さいたま市北区宮原町 1 丁目 66-2 応用地質(株) TEL048-663-8614

〒377-0053 群馬県渋川市北橋町箱田 972-2 (株)山地防災研究所 TEL0279-52-4621

砂で埋積されており道路橋の上から俯瞰できるが被災者のご厚意に思いを及ばすにはいられない。道路橋の近くには直売所を兼ねた震災復興資料館さとみあん（郷見庵）がある。⑦震央は斜面耕作地にあり、狭い平坦地に震央を示す標柱が設置されている。現地調査の際は積雪期直前であったため、標柱は撤去されてブルーシート下に保護され台座（写真5の左）のみを確認した。豪雪地帯のため積雪による標柱の損傷防止対策が講じられているが、常設可能な石碑等への変更が望ましく思われた。また、この地点は県道に立派な入口表示板があったが探すのに苦労したので案内板の追加が必要に感じた。

3. 慰霊碑等

震災犠牲者を供養した場として、前述の妙見メモリアルパークの他に長岡市濁沢と小千谷市塩谷に慰霊碑が建立されている。濁沢では地すべり末端の斜面が崩壊し、家屋を押しつぶした上に県道を埋没させて2名の住民が犠牲になった。崩壊斜面を見渡す対岸に自然石の慰霊碑が設けられている。この場所は県道からやや高い位置にあるため木製表示板はあるが注意しないと見落としてしまう（写真6）。塩谷集落では家屋の倒壊により犠牲になった3名の児童の慰霊碑が住民一同によって建立されている（写真7）。写真左手の研磨された黒御影石に災害の説明などが記載されているが反射により文字を読むことに苦労する状況であった。



写真6 濁沢集落の慰霊碑



写真7 塩谷集落の慰霊碑



写真8 寺野の河道閉塞の説明版

一方、旧山古志村の東竹沢、寺野では地震動により発生した地すべりが芋川を堰き止めダム湖が形成された。この堰き止め土塊の決壊対策として、緊急的なポンプ排水や河道閉塞箇所の補強に始まり、応急的な排水路や恒久対策としての砂防堰堤が建設され、地すべり対策が合わせて実施された。この工事の説明版が国土交通省によって2か所の河道閉塞箇所に設置され、説明版の台座は積雪にも耐える構造物となっていた。ただし、説明内容の崩壊土砂量についての英文記載に百万 m^3 単位の誤りが2か所ともに認められたのは残念であった。

4. おわりに

中越地震の被災復興状況を現地で学習するためのツールとして、土木学会斜面工学委員会では「新潟県中越地震土砂災害学習マップ」¹⁾を平成19年に作成して被災地域に配布するとともに研修会を実施した。この活動を大きく凌ぐ中越メモリアル回廊の取組みは、中越大震災の実態や復興を伝承し人材育成をも目的として平成23年～25年に整備され運用されてきた。災害伝承といった面からは長期継続性が求められるため、施設等の維持管理費の問題が課題としてあげられ、公的な投資を維持するために地元住民の理解を得られる仕組み作りが重要と思われる。

また、災害伝承を担う目的でもあるメモリアルパークの表示板や慰霊碑等の材料は、強度・耐久性があつて劣化しにくい石材が望ましく、具体例をあげれば明治時代の土石流災害（広島県）や津浪災害（岩手県）に関する石碑があつて100年を経た現在も劣化することなく被災状況を克明に伝えている²⁾。

参考文献

- 1) 土木学会 地盤工学委員会 斜面工学小委員会：新潟県中越地震土砂災害学習マップ，<https://www.jsce.or.jp/committee/jiban/slope/old/map/map.pdf>, 2007.
- 2) 上野将司：応用地質アラカルト 役立つ災害地質の知識 (23) 災害伝承としての石碑等について，応用地質，Vol.61, No.5, pp.272～278, 2020.